

## 分科会報告

文責：近藤誠司

本分科会では、2017年に結成された「復興ワードマップ研究会」の、ひとまずの成果報告がおこなわれた。この研究会は、災害復興学をめぐる「ことば」のダイナミズムを研究対象の中心に据えることによって、復興とはどのような営みなのかを逆照射することを主眼にしている。

研究会メンバーは、それぞれ独自のアングルから、「ことば」に着目したホットなレポートをおこなった。

第1話者（近藤誠司）は、「災害弱者」、「要援護者」、「要配慮者」ということばたちが、対象を広く包摂しようとするがあまりに、内実が希薄化していく逆説的な傾向を孕んでいることを指摘した。第2話者（石原凌河）は、「事前復興」ということばが、論者によってかなり異同があるものの、全般的には行政管理主義的な運動に加担しながら流布している現況を抉出した。第3話者（立部知保里）は、「コミュニティビジネス」と「ソーシャルビジネス」の射程の違いから、具体的な被災者に対するまなざしや思いが、徐々に抽象的に脱色されていく風潮があることを見出した。

第4話者（李勇昕）は、台湾の情勢から、「レジリエンス」や「コミュニティ」ということばの流行が光と影を生み出していることを報告してくれた。第5話者（大門大朗）は、アメリカの視点から、英語化しにくい“曖昧な”日本語が数多く流布していることを、あらためて示してくれた。そして第6話者（宮本匠）は、ことばの限界をふまえた、ある意味で“戦略的な”アクションリサーチの地平に踏み出すことを提案してくれた。

会の後半では、来場者と登壇者が一緒になってディスカッションをおこなった。「被災地／被災者／当事者／関係性」といったことばに対する“賞味期限や適用範囲”に対して、立場や経験によって多様な感受の仕方があることが示された。ことばをめぐる哲学的な洞察を経て、再び実践を鍛え上げる回路が求められていることを確認した。